

椿に仮託するとき―矢野京子小論―

金子智佐代

一

大地より噴き出づることあまたなる枝放射
せり櫻新樹は 『風影集』

鬱の波躁の波揺るるわが渚生きるとはつひ
にしづまらぬこと 『草少女』

娛しからむ釣糸投げて若き二人海引き寄す
るごとく竿張る 『涯の空』

大空に向かい、放射状に枝を広げる櫻を生き生きと詠む一首目。地中までイメージさせる一、二句の比喩が、櫻の命の息吹、その生命力を立体化する。

二首目。自らの内面を波うつ渚に喩え、具象化することで、警句めく下の句へ力強く誘導する。生きることと表裏一体の鎮まらぬもの、作者の場合、それは表現への欲求だろうか。

矢野京子は大正十四年、福岡県に生まれた。昭和十八年、十八歳で白秋没後の「多磨」に入会する。矢野の文章（「コスモス」平成十三年四月号の「実作をめぐって」）によれば、当時は、「戦争の皺よせがじわじわと身辺を狭め、勤労奉仕で飛行機工場へ動員され、その間を縫って教室へ出て勉強する」という不安な時代であった。その後、「多磨」の廃刊に

伴い、昭和二十八年、創刊時の「コスモス」に参加。昭和五十七年にはコスモス賞を受賞する。戦時下、戦後の混乱を潜ってきた歌作。矢野にとって歌作は、すでに生きることそのものだったに違いない。

三首目は磯釣りの場面。下の句の「海引き寄するごとく」が出色だ。この比喩がくつきりと、海を引き寄せる糸と竿と二人のシルエットを映し出す。

この陸・海・空のダイナミズムに繋がるような、大胆で潔いユニークな表現が、矢野ワールドの最大の魅力である。矢野に言葉を与えられ、「櫻」も「渚」も「若き二人」もおのずから輝き始めた。

二

これまでに矢野が上梓した歌集は

- ① 『風影集』（平成元年、32歳〜63歳、七五〇首）
 - ② 『草少女』（平成十二年、63歳〜74歳、五七二首）
 - ③ 『涯の空』（平成二十二年、75歳〜83歳、五〇八首）
 - ④ 『あけがたの夢』（平成二十九年、83歳〜92歳、四四三首）
- 以上、四冊。捜し物の歌を、それぞれ一首ずつ引く。

何が残る何が残ると自らに問ひつめてゐし

今日も暮れたり

『風影集』

二階より深紅の夕日見つつおもふしんじつ

は一つ攔み難きか

『草少女』

ふと何を捜しをりしか忘れりて茫と佇つと

きこの世くさはら

『涯の空』

ごみの山仕分けしてゐるあけがたの夢ひた

すらに何捜しゐる

『あけがたの夢』

一首目。何を求めているのか、何を残したいのか、具体的な提示はない。ただ、この頃の作者は、家事・育児・教職の目まぐるしい生活の只中だった。形而下のもるもるに忙殺され、歌作の欠片も得られない、そんな苛立ちや焦りが背景にあるのだろう。鋭い緊迫感を夕闇が包み込む。

二首目は一つの「しんじつ」を眼前の夕日に見立て、見えているのに捉えがたいはがゆさを醸し出す。しかしすでに、一首目の緊迫感はない。捜し物が明確になり、遠いけれども見えている、そんな余裕がある。

『草少女』の「そんなに優しく神様みたいになれないよと誰にともなく呟く春の夜」、「ほんたうはなんにも解つてないあなた」樹々鳴らしつつ風が囁く、この二首が矢野の転機となった。前述の「実作をめぐって」から引用する。

私の心の中から、ぶつぶつとあぶくのように出てきたことばを、そのまま一首の中に据えてみたのだが。(略)それが誌上に載っていた時の嬉しさは言いようがなかった。(略)微かな希望をもつことが出来たが、もう七十歳が目前であった。「コスモス」平成十三年五月号

破調や口語、山括弧の使用、そして、写生に囚われない表現の可能性等々、矢野が手応えを感じた瞬間だった。

三首目。何を捜していたんだっけと我に返ったとき、己の立つ処が草原だったことに、改めて気づく作者。「くさはら」が、どこか明るく懐かしいのは、ア段の音韻の効果だろうか。青空、髪を吹く風、野原、心象の広やかな時空である。

四首目は第四歌集のタイトルの歌。ここでは、今も捜している、夢の中でも捜している、そこが重要だ。作者は決して満足などしていない。

かくして矢野は、苦悩し、試行し、真実の歌、借り物でない自分の歌を捜し続ける。人間とは何か、言葉とは何か、美とは何か等々、矢野にとつて、すべての問い、すべての捜し物は、真実を捉える歌に収束すべきものなのだ。

三

矢野作品を読み解くキーワードは「風」、「睡り」、「夢」、「さびし(さ)」、「かなし(さ)」等々、いくつもあるが、今回注目したのは「椿」。老齢を意識した矢野がマンシヨンに移るまで、長く暮らした家の庭木である。

① はだら雪泪のごとく溜めてをり落ちて仰向
く椿の花は 『風影集』

② 降りしきり雪けぶるなか咲き初めし椿は闇
を抱くごと立つ

③ ここだ落ち汚るる椿昨日に似し今日・今日
に似し明日が続かむ 『草少女』

④ 枝揺りて遊びゐし鳥ら去りゆけば椿は椿の

暗さにもどる

⑤ 花殖やしゆく庭椿うす紅のあふるるおもひ

語り聞かせよ

『涯の空』

⑥ 夜の庭に黙つて佇つてゐる椿さわぐ心を静

かならしむ

⑦ ころざしはどこかへ消えてしまつたがで

ももういいよ椿が赤い

『あけがたの夢』

⑧ 枯れ椿捨ててしまへば甕ひとつ冥き口開け

風を吸ひ込む

各歌集から制作順に二首ずつ引いた。大まかに分類すれば、①～④の椿は憂愁を抱えた作者の化身のようであり、擬人化された⑤、⑥の椿は近しい友のようであり、⑦、⑧は椿への執着を自ら解き放つたような詠いぶりだ。朝に夕に、矢野は椿の命の声を聴き、自らの心、その真実の叫びを、隠すことなく伝えてきたのだらう。六十年以上を共に過ごした椿、その関係性の移ろいは至極当然な成り行きだが、それは同時に、歌人矢野の表現の深化とも関わっている。

ところで、矢野は含羞を知る人だ。

自分が生める子に着せむとて励み編むたとへ

ば獣の愛のごときか

『風影集』

慈愛あふれる母親の、自己陶醉の歌になり得る場面だが、矢野はそうは詠まない。己の裡に蠢くものを見逃さない厳しい視線がここにある。歌作に客観的視線は欠かせないが、矢野は己に厳し過ぎる。逆に、椿に向ける視線は優しい。だから、素直な視線で捉えた椿に仮託するとき、矢野の本来の姿

が見える。本音が見える。椿の歌を選んだ所以である。

①はうつすらと斑に雪を被る椿をズームアップして、たっぷりとした存在感を捉える。自ら絵をよくし、絵画に造詣の深い矢野らしく、美的で絵画的ながら抒情的だ。

②に限ることではないが、『風影集』の「あとがき」に「十歳の頃の病気で左足が不自由になり(略)、そのことが(略)小心な性向を生み」とあって、内向性の自覚が更なる思索を促したかも知れない。見尽くした後の「闇を抱くこと」という把握にすこみがある。象徴性を帯びた写生だ。

③では、変化のない、平板な日々積もりゆく濃厚な閉塞感を、数多き落椿の、その汚れが象徴する。

④の、有から無へ、動から静へ、騒から寂へ、明から暗へ、この転換の見事さ。椿は暗さを取り戻すが、転換によるギャップが、さらに椿の闇を深くする。さて、椿の葉叢の闇と重なるのは作者の闇、すなわち、表現者の闇だ。歌作のために、内も外も凝視し、思索し、見えないものの底の底まで知ろうとする、果てしない欲望の闇である。

⑤は、次々に花を着ける椿に、溢れる思いを聞かせてくれと頼んでいる。椿にはそんな思いがあるようだ。しかしこればかりも直さず、歌人矢野に溢れる思いがあるということではないか、そう思う。①～④のように、描写した椿に自らを仮託するのではなく、椿の中に自分自身を見ているのだ。

絵とともに惹かるるその生 ゴッホ・シー

レ・北斎・野十郎みな破滅的 『草少女』

〈整齊〉より〈破綻〉の見ゆる絵に惹かる

長く生きつつ変ることなく 『あけがたの夢』

ゴッホ・シレー・北斎・野十郎、彼らの歌は、他に、のべ十七首。矢野の〈破綻〉への志向は、創作の欲望そのままに生きた画家たちへの敬意、そして、羨望だ。勿論、矢野が暴走することはないが、思いはある。それは、狂氣的と言えるほどにある種突き抜けた表現、そんな歌作への思いである。矢野の溢れる思いが、〈破綻〉に共振する。

⑥の椿は、そこに在るだけで作者に安らぎを与える存在として、屹立する。二者の間に流れた歳月を思う。

⑦の「こころざし」で思い出すのは、次の一首。

ひろひろひろポプラ嫩葉は震へつつ遙かな
り空を指すこころざし 『涯の空』

前歌集の一首を下敷きにする歌人の遊び心が軽やかで、チャミングだ。破調や句割れ、句跨がりは、言葉流さず強調したい矢野の多用するところだが、ここに〈破綻〉への志向が表出していないとは言えない。時に屈託のない歌にも使用して、自在である。一首は、軽快な半濁音に乗って、「空を指すこころざし」のはるけさが伝わる。⑦に戻ろう。四句「でももういいよ」は誰が誰に言ったのか。椿と作者が交錯するが、椿への労いの言葉だろう。何度も読むうちに理屈が邪魔になり、天の言葉のような不思議な慰藉を感じてしまう。ただただ、椿の赤だけが鮮明だ。

歌集では、⑧の歌の少し前に、「やうやくに九十一歳の大壺となりたる吾をどこへ連るるか」がある。よって、⑧の甕も作者の化身である。甕と化すに当たり、初句で、これまで

わが身を仮託していた椿を捨てるころ、義理がたく、矛盾がなく、ユーモラスだ。ところで、風と甕という設定なら、外せないのが、次の一首。

夏 ひそと死びとのやうに風は来て花なき
甕の膚撫でてゆく 『草少女』

風が撫でてゆく甕、そのつると冷たい陶磁器の感触がリアルだ。繊細な感性の冴えも矢野作品の醍醐味の一つである。矢野の歌材は決して多くない。己の魂に触れるものを繰り返し詠むスタンスだ。そんな矢野が椿を詠んだ。与えられた場所で、年々歳々花を咲かせる椿への共感が、仮託し、同化し、入れ替わり、労い、捨てるまでのストーリーを生んだのだ。そして何より矢野が愛したのは、散るのではなく、花首から落ちる、そんな椿の潔さだったかも知れない。

四

最後に、ひそかに愛誦する一首を紹介して稿を閉じたい。

浮上しゆく飛行機の下大股に歩く人大地を
つゆ疑はず 『涯の空』

人は自らが拠って立つ場所、大地を、全く疑わない。それが普通だろう。だが作者には、それが危うく見える。いつどこで何が起こるか、誰にも分からないのだから。〈機上の危うさ〉と〈大地の危うさ〉を一気に反転させた、矢野ワールド二、二七三首中屈指のミラクルな一首。

無論これは、他者を貶めるものではない。疑わないからこそ、人は自信に満ちて、大股で闊歩できるのだ。気づかないゆえの幸せということだって、ある。